



花粉媒介者がやってくる太陽光発電施設(ミネソタ州)
Photo courtesy of Board of Water and Soil Resources, Minnesota, USA

有機農業と太陽光発電でソーラーシェアリング(千葉県 匝瑳市)

環境への負荷が少ない太陽光発電の形の一つに、営農型発電事業があります。現在、北海道から沖縄まで2,000ヶ所以上あると言われる「ソーラーシェアリング」は千葉県で生まれました。

先駆的な存在の「市民エネルギーちば株式会社」は、千葉県内の環境や自然エネルギーに関わる複数の団体有志でつくられました。東日本大震災後に原子力に代わる発電を模索して生まれたため、環境への負荷をかけないことに重きをおいています。山を切り開いたり、敷地内をコンクリートで固めたり、除草剤をまいたりする発電所はつくらないこととし、有機農法で、かつ営農をおろそかにしないソーラーシェアリングにたどり着きました。

現在1MWの設備と360kWの設備が1機ずつ、あとは50kW以下の設備が20機ほどあります。1MWの匝瑳メガソーラーシェアリング第一発電所は、32,000㎡の広さで、高さ3mに約90cmの間隔で10,400枚のパネルが並んでいます。使用している細形のパネルは農作物に当たる光を均等にすることでなく、土に対する雨だれや風の影響も抑える効果があります。

地域への貢献として、50kW以下の設備は、すべて災害時に無料の充電ステーションとなるようにしています。2019年の台風15号による停電の際は、復旧までの6日間、発電した電気を無料で提供しました。現在は防災拠点として市と協定を結んでいます。

また、売電による収益を基に「村づくり協議会」を立ち上げ、基金をつくりました。この使い道は農業支援、環境保全、子どもたちの育成を含む地域活性化に特化しています。去年は合計で350万円になりました。

今年の秋には2MWの施設ができる予定で、それにより基金も年間500



ソーラーシェアリングの下で育つ麦(匝瑳市)

万円を超えることが見込まれ、お年寄りの移動手段や竹林の整備など、地域に必要な事業に対する無利子の貸付が検討されています。また、600弱の世帯の電力もまかなえるようになるため、地域での自立的な電力供給をするマイクログリッドの確立を目指しています。

かつては痩せた土地で採算性が低く、高齢化もあり離農や耕作放棄地が増え、不法投棄もされていました。その場所が、ソーラーシェアリングにより、有機の大豆畑、麦畑として蘇りました。収穫物をビールや味噌などに加工して販売する六次産業化を推進したほか、農村民泊といった事業にも取り組み、移住者が増えています。

この取り組みの見学に年間1,500もの方が訪れます。企業からも注目されていて、アウトドアブランド、パタゴニアの電力の約半分は、ここで発電された電気で購入されています。耕作放棄地の活用を目指した規制緩和の動きもあり、今注目されている太陽光発電です。

自然への負荷を減らした発電を

太陽光発電をはじめ、再生可能エネルギーを進めていく必要はありますが、自然になるべく負荷をかけないように、うまくバランスをとる必要があります。どのような対策がとれるでしょうか。



1MWの匝瑳メガソーラーシェアリング第一発電所